いやぁ～・・・坂井先生。ほんま好き（笑）僕は坂井先生のこういうマインドが大好きなのです。ちゅうか、解るでしょ？僕の事を少し知っている人なら僕が大好きな理由が（笑）僕が感覚で感じてる事を坂井先生はきちんと言葉に文章に出来る。最高ですわ。
ほんまに。皆さん「とりあえずやってみてください」（笑）　久田

第 95 回『わかるように伝えていますか』

香川大学　坂井　聡

発達障害のある児童生徒のことで、先生や保育士の相談に乗ることは多い。その時に感じるのは、その子どものできない面にばかり視点を当てた相談が多いことだ。

「〇〇ができないのです。どうしたらよいでしょうか？」「〇〇して困るのです。どうすればよいでしょうか？」といった内容である。

できることなどは、特別時間を作って相談する必要がないので、当然といえば、当然なのだが、相談内容を聞いていると少しつらくなることがある。

先日の相談もそうだった。診断を受けている自閉スペクトラム症のある男の子の相談である。「集団での活動ができません。どう指導したら集団にきちんと入ることができるようになるでしょうか？」加えて、「言うことだけはきちんと言うんですが、周囲の人の気持ちを考えずに言うので、ますます集団に入れなくなるのです。」というものだった。その子ができないことに視点が当てられた質問である。この手の質問を受ける専門家も多いことだと思う。しかし、ちょっと考えてみよう。その子どもができないことで、先生が改善しようとしていることは、自閉スペクトラム症のある人の気質に関連する部分である。社会性に発達的な偏りがあるために、自閉スペクトラム症の診断がつくのである。周囲の人の気持ちを想像することができにくいために、自閉スペクトラム症の診断がついたのである。その子どものできない面は、その子の気質に関連するところであり、それを改善することができるならば、診断を改めなければならないだろう。つまり、凸凹の凹については、その人の気質によるものが大きいので、できなくても仕方がないところなのである。

ということは、相談しても無駄なのかとなるが、そんなことはない。では、どのように相談をすればよいのだろうか。アイデアを引き出すためには、できることから先に話すことである。「二人から三人の小グループの時は、活動できるのですが、クラス全体で取り組む大きな集団になるとできないことが多いのです・・・・。」「はっきり物事を言うので、答えが明確なときは良いのですが、周囲の雰囲気を無視して言うことがあるので・・・・。」

つまり、認めている部分から話すことである。もっとできることに視点を当ててそこから話してみよう。できる部分、認めている部分に、解決のためのヒントが隠れていることが多いと感じるからである。

わざわざできないことをクローズアップして相談する必要はない。できることを考えて、そしてできないことを相談する。これをするだけで、目の前にいる子どもが、「これは、できる子どもなのになー」と考えられるようになるので、気持ちがやさしくなるはずである。とりあえずやってみてください。

坂井聡先生の紹介

（プロフィール）
香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了、 香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、 現在香川大学教育学部障害児教育コース准教授 1997 年 自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞。 2013年より教授に就任。
（著書）
暮らしの中のコミュニケーション（やまびこの里）クラスルームコミュニケーション（こころリース出版会）自閉症や知的障害をもつ人とのコミュニケーションのための10のアイデア（エンパワメント研究所）など